

報道関係者各位

2026 年 1 月 21 日

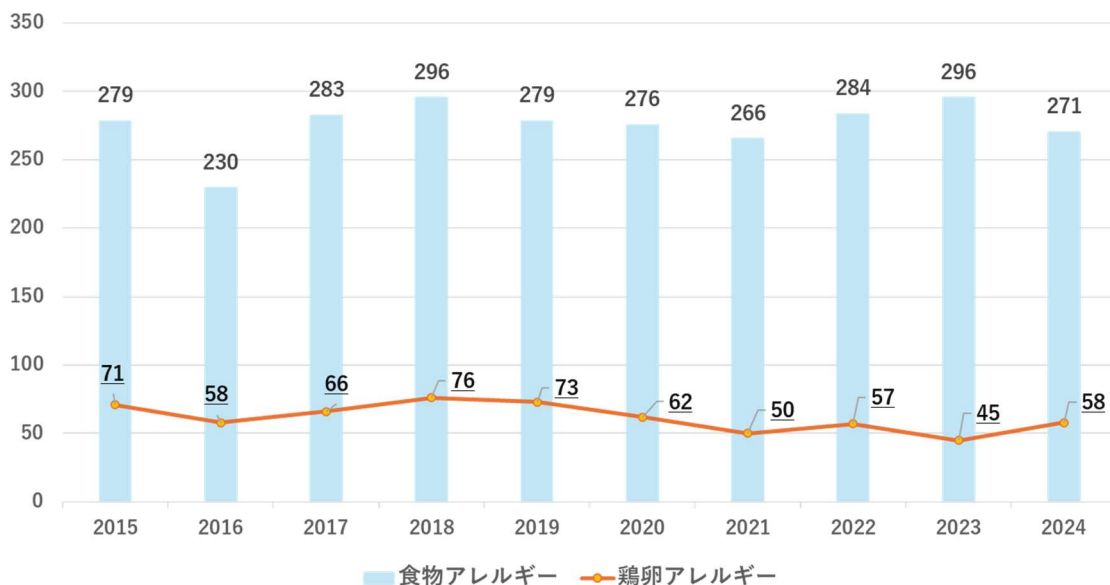
国立成育医療研究センター

**鶏卵の早期摂取推奨後も、鶏卵アレルギーの大きな減少は認められず
～食物アレルギーの最も多い原因食物が鶏卵からナッツ類に変化～**

国立成育医療研究センター（所在地：東京都世田谷区 理事長：五十嵐隆）救急診療部の大西志麻、植松悟子、臨床研究センター朴慶純、アレルギーセンターの谷口智城、福家辰樹、山本貴和子らの研究グループは、2017～2021 年にかけて離乳食における鶏卵早期摂取の提言・推奨が導入された前後で、食物アレルギーで救急外来を受診した患者数や症例にどのような変化があったのかを検討しました。

本研究では、2015 年から 2024 年までの 10 年間に当センターの救急外来を受診した約 2,800 件の食物アレルギー症例を後ろ向きに解析しました。その結果、鶏卵の早期摂取が推奨された後（2022 年以降）も鶏卵アレルギーの有意な減少は見られず、食物アレルギーによる救急外来の受診数も 10 年間で大きな変化は認められませんでした。その一方で、ナッツ類（クルミ、カシューナッツなど）のアレルギーが急増し、食物アレルギーで救急外来を受診する原因食物の内訳には大きな変化があることが明らかになりました。

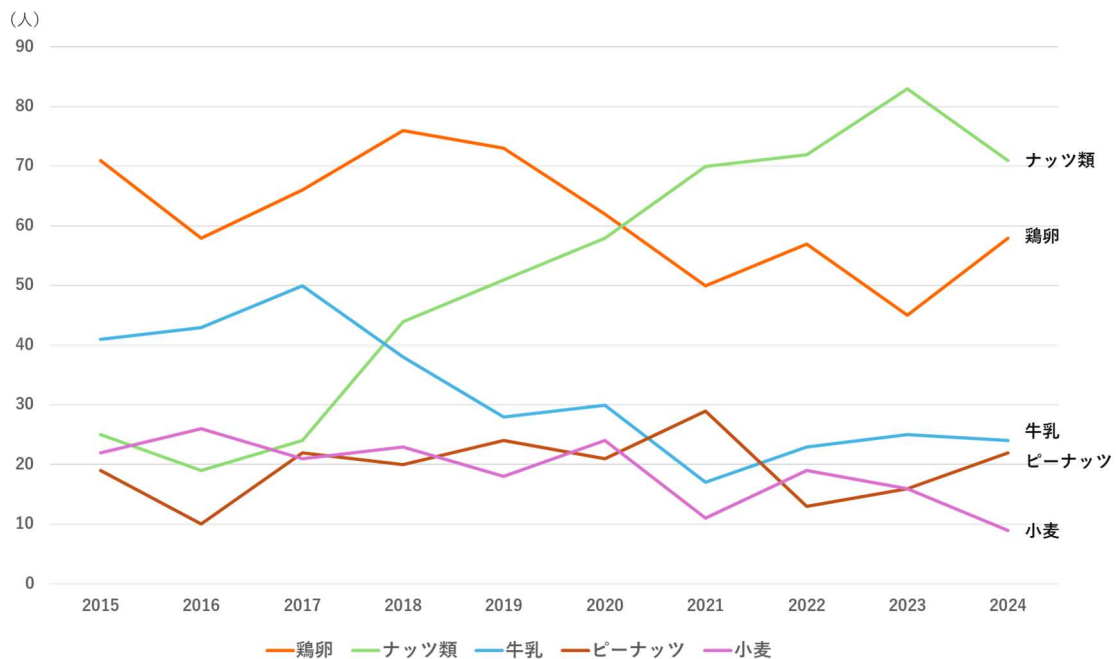
本研究成果は、イギリスのアレルギー学会雑誌「Clinical Experimental and Allergy」に掲載されました。



【グラフ 1：食物アレルギーと鶏卵アレルギーにおける救急外来受診数の推移】

【プレスリリースのポイント】

- 本研究では、2015 年～2024 年の 10 年間に国立成育医療研究センターの救急外来を食物アレルギーで受診した約 2,800 件を対象に調査しました。
- 日本で推奨されている鶏卵の早期摂取の推奨が導入された後（2022 年以降）も、鶏卵アレルギーで救急外来を受診する数に有意な減少は見られませんでした。（グラフ 1）
- 食物アレルギーによる救急受診数は、2015 年～2024 年の 10 年間で横ばいでした。（グラフ 1）
- 一方で、ナッツ類による食物アレルギーの救急受診は急増しており、現行の食物アレルギー予防戦略では対応が十分でないことが示唆されました。（グラフ 2）



【グラフ 2：食物アレルギーで救急外来を受診した患者さんの原因食物の推移】

【研究の背景】

食物アレルギーは、小児アナフィラキシーの主要な原因の一つです。日本では2017年以降、湿疹を適切に治療した上で、生後 6 か月頃から加熱した少量の鶏卵を摂取することが、食物アレルギー予防として提言・推奨されてきました。

当センターを中心に実施された PETIT 研究¹により、鶏卵の早期摂取が乳児の鶏卵アレルギー発症を予防する可能性が世界で初めて示され(LANCET 2017)、この成果が国内外のガ

¹プレスリリース「離乳期早期の鶏卵摂取は鶏卵アレルギー発症を予防することを発見」（2016 年：
<https://www.ncchd.go.jp/press/2016/egg.html>）

イドライン改訂の科学的根拠となりました。

これを受け、「授乳・離乳の支援ガイド（2019 年改定版）」では卵黄の開始時期が離乳初期（5～6 か月頃）となり（1995 年「改訂・離乳の基本」に戻した）、さらに「食物アレルギー診療ガイドライン 2021」においても、同様に推奨されています。しかし、これらの推奨が実臨床、特に救急外来の受診というアウトカムにどのような影響を及ぼしているのかについては、これまで十分な検証が行われておらず、本研究のように食物アレルギーでの救急外来受診数の推移を解析する研究が求められていました。

【研究概要】

～研究方法～

- 対象期間：2015 年 1 月～2024 年 12 月の 10 年間
- 対象患者：国立成育医療研究センターの救急外来を受診した 18 歳未満の小児
- 対象数：約 2,800 件の食物アレルギーによる救急受診を対象
- 解析：食物アレルギー、アナフィラキシー、口腔アレルギー症候群で受診した症例を解析（※経口免疫療法に関連する症例は除外）

～主な結果～

- 食物アレルギーによる救急受診数は 10 年間でほぼ横ばい（グラフ 1）
- 死亡例は認められませんでした
- 食物アレルギーの原因食物の変化（グラフ 2）
 - 2015 年：卵・小麦・牛乳が主因
 - 近年：ナッツ類（クルミ、カシューナッツ、アーモンドなど）が最多の原因となる
- 2015～2017 年と比較して 2022～2024 年では
 - ナッツ類（クルミ、カシューナッツ、アーモンドなど）による食物アレルギーを発症する可能性が高い（アレルギーを発症する“オッズ”が約 4 倍）
 - 牛乳アレルギーは有意に減少
 - 卵アレルギー全体では大きな減少は認められなかった
ただし、3 歳以上の年長児では軽度の減少傾向

～考察～

本研究から、鶏卵の早期導入推奨が、少なくとも救急受診レベルの鶏卵アレルギーを明確に減少させたとは言えないことが示唆されました。乳幼児期における鶏卵アレルギーが減少していないことから、ガイドラインが十分に社会に浸透していない可能性や、卵黄からの早期導入となって、卵白導入が遅くなっている可能性もあり、導入初期には一時的にアレルギー

一症状が表面化する可能性も考えられます。

一方で、ナッツ類アレルギーの急増については、日本の乳幼児食での摂取機会の少なさ、食生活の欧米化、環境中へのナッツ抗原暴露などが関与している可能性があります。

～本研究の意義～

本研究は、アジアにおいて初めて、早期鶏卵摂取の推奨が示された前後の小児食物アレルギー救急外来の受診動向を10年間にわたり検討した実臨床データです。軽症から重症までを含むすべての救急症例を対象としたことで、食物アレルギー全体の負担や原因食物の変化を包括的に評価できました。

【今後の展望】

今回の結果は、以下の3点が重要であることを示しています。

- (1) 早期食物導入の推奨だけではすべての食物アレルギー発症を抑制できない
- (2) 家庭や医療者へのさらなる啓発や支援が必要
- (3) ナッツ類など新たに増加しているアレルゲンへの対策が重要

今後は、地域レベルや全国規模での臨床疫学研究を進め、より効果的な予防戦略の確立を目指します。

【発表論文情報】

論文タイトル: Trends in Emergency Department Visits for Food Allergy in Children Before and After Early Introduction Guidelines in Japan: A 10-Year Retrospective Study from a National Tertiary Centre

雑誌名: Clinical Experimental and Allergy

DOI: 10.1111/cea.70208

著者: 大西志麻(筆頭著者)¹、植松悟子¹、谷口智城²、朴慶純³、福家辰樹²、山本貴和子(責任著者)²

所属:

- 1) 国立成育医療研究センター 救急統括部
- 2) 国立成育医療研究センター アレルギーセンター
- 3) 国立成育医療研究センター 臨床研究センター

【問い合わせ先】

国立成育医療研究センター 企画戦略局 広報企画室 村上 神田

電話: 03-3416-0181 (代表) E-mail: koho@ncchd.go.jp